

序 人で在って、人で無いもの

「まあとにかくおめでたいこった。あの小さかった子供が、今やこんなポインちゃんだからな。立派に育ちよって…わしも年を取るわけじゃの…」

彼はそう言つて、大ジョッキを煽った。

「お前つて、いま新聞記者だったっけか？…仕事は順調か？」

「ああ、順調だ。今は編集部長だよ。部下だっているぞ」

「フン…ガキがいつちよ前に部長と来たか」

彼はそう言つて、浅くため息をついた。

「…酔っ払う前にやつちまうか。ホレ…、メガネ取つて、顔を近くに寄せなさい」

店を退いたと言つても、アレはまだまだ現役のようで…。私は素直にメガネを取つて、彼に顔を寄せる。

「最近すっかり乱視が進みよつてな…ホレ、もっと近くに寄らんかい」

「あんたの場合もう老眼だろ。あまり寄せさせるな。気色悪い…」

「最近は爺婆が多くてな。若い娘は久しぶりで興奮するのう…」

「もう若くは…ええい！触るな！…この距離で…さつさと観ろつ」

「若いのにケチじゃのう…もつと年寄りを大切に扱わんか…、まったく…」

彼は水晶玉も虫眼鏡も使わない。ただ…顔を見るだけだ。ウチの社の近くを通つたというだけの理由で、私は酒の席を都合させられた。

「渋い顔しおつて！…大スクープの一つや二つは都合してやるわい。酒の一席や二席、安いもんだらうが」

「…いくらあんたの占いが当たるからといって、起こつても無いことを記事に出来るか！」

「なんじゃい…固いのう。あんたんトコは」

「…ウチ以外の社だつてみんなそうさ」

彼は焼き鳥串を豪快に口先から引いて、肉とネギを頬張つた。人の金だと思つて遠慮が無い。

「で、…どうだった？…私は？」

肝心の事を彼に尋ねる。彼の…コレばかりは、ドキドキせずには聞かれない。

「あ、お姉さん！大ジョッキおかわりええかいの？串も全種類三本ずつ追加じゃ。ジャンジヤン持つて来なさい！」

言つて、今持っているジョッキを飲み干し、ガツンとテーブルに置いた。

「なんじゃい。結果、聞きたいのか？」

聞きたいに決まつてる。それなしにこれだけ飲み食いする気なんだろうか。この爺は…。

あまり調子に乗ると、それはそれで厄介なことになる……私の表情からそれを察したかのよう
に、彼は喋りだした。

「洋香……お前、迷つとるのう。結婚……いや、違うな……。仕事のことか、男は相変わらずいな
いようだのう？部下にも、以前より恵まれておるな……」

言つて、おしぼりで顔を拭きながら、目だけをこつちに向けて、

「……フン、脱サラでも考えとるのか？おヌシ……？」
そう言う。

相変わらずよく当てやがる……。本人は、占いの知識と経験は一割ほど、推理が五割、感が
五割……と昔から言い張っていた。計算が合わないのが彼らしく、言い回しに彼の天邪鬼な感
じがよく出ていた。

「……おぬしは今も帝王の相を持つてる。ほんの少しだけじゃがの……。何をやってもそれなり
の成功はするじやろうよ。まだまだ若いのに……そのツラ持つて迷うかねえ……。好きにやれば
いいさ」

彼は、優しい目で静かに私にそう言つて、品書きを手を取った。

「あんた……まだ食べるのか？」

「なんじやい？……経費で落ちるじやろ？？」

「……今は経費もロクに落ちんよ。時代性は読めんのかあんたは……」

「なんじや……お前のところも厳しいのか？」

彼は名を藍老伊三郎と言ひ、この熊本県熊本市に占いの店を持つ、名うての占い師だった。
若い頃は日本各地を放浪し、あらゆる人相を覗てまわり、自分の見識を高めた。道中のどこ
かで占い……というか、人相見の極意のきつかけを掴み……、心理を開眼したとのことで……それ
以後、彼の占いは、酔っ払い相手だったチンケな商売から、実業家や政治家相手の……会社や
国の未来をも左右するものにまで成長した。そして、その名が天下裏で轟くほどとなり、社
会的成功と金、名譽、人脈を手に入れた。

ここまでは良かった。しかし、ある日……ふと鏡を見た際、自分の人相の難を見抜いてしま
つた彼は、破滅の道を辿る前に、家土地と財産をすべて処分し、熊本市という自分の生まれ
故郷に四畳半のアパートを借り……、店となる小規模な商業スペースを間借りし、占い屋を開
いて……細々と生きることにした。本人曰く……それで自身の死を免れたそうだ。

私は小学生だか中学生だかの時、ホームレス同然だった彼とふとしたことから知り合い、
学校つまらないことから、人生のあり方、オカルティックなことまで……彼に喋った。彼と
はそれ以来……十数年の付き合いになる。生まれつき、オカルトなこと……霊だとか、UFOだ
とか、未確認生物だとか、X・F・I・L・E・Sだとか……そういうモノが大好きだった私は、当時
お化けみたいな格好をして、河原にいた彼に好奇心いっぱい話しかけたことを覚えている。

会った時から彼には口癖があった。

「ガキにわかるかねえ？要は…見てみたいだけなのよ」

「…何を？」

「神か悪魔か…そういうもんをじゃな…」

子供だったこともあり、最初こそ小馬鹿にしたものだが、事あるごとに言うわ、目は真剣だわ、そして…どこか寂しそうに言うもんだから…いつからか、私にとつてもすぐく気になることとなった。そして、私は聞き逃さなかった。彼は何度か、

「…もう一度見てみたい」

と、そう付け足すこともあった。もう一度ということは、今までにも見たことがあるということだ…神か悪魔だか…そういう人外のモノを…。

しかし、彼はその存在をこう説明していた。

「まーたお前は…話をそういうオカルティックな方へ持って行きたがる…。人外のもんなってこの世におけるわけないじゃろ。…わしが言つとるのは、あくまでも人間のこつちや」

藍老の爺さんは占い師なんぞやつてるくせに、私と違って…オカルトなものは頭から否定する傾向にあった。そういう面では実につまらない。

「お前らよく芸能人オーラとか、雰囲気とか言っておるじゃろが。世の中にやな、あのオーラかなんだかよくわからんもんを、滅茶苦茶なレベルで醸し出すやつがおるんじやな。…そういうモンをだな、わしや神だの悪魔だのと呼んでおるんだ」

彼はよくそう言っていた。そして、神だか悪魔だかをもう一度目にすることができたなら、「わしや引退する…」とも。

幾度と鳴っていた、公衆電話からの着信。公衆電話からかけてくるのは彼しかいない。掛け直しが利かないため、連絡はいつも一方的だった。その彼からのその連絡は、一週間前に来た。

「お、やつと電話に出よつたのう。…いやなに、今？…待ち時間をヒマしているとこじやい。実は、先日わしや店を畳んでの。今度近くに行つたときに酒でも一杯、と思つとつてね。もしもし？…まだまだ腕は確かじゃぞ。酌に付き合ってくれるなら、特別におぬしをまた見てあげてもよいぞ」

なんだ？…爺、ついに見たのか？神だか悪魔だかの存在をついに見たのか…。ついこないだまで、

「わしや、一生こうしてせこい店を構えておかねばいかんのかもしれんなあ…」

などと、弱気に言っていたことが思い出される。良かったのか悪かったのか。

藍老爺に関しては、もうひとつに気になることがあった。それは彼の占いの腕のこと。旅路の最中に開眼したとの話は、すでに触れた通りだ。酒に飲まれた彼が、一度だけ口からこぼしたその言葉を、私は鮮明に覚えている。

「いや、それがの…開眼したと言っても、そんな大仰なもんじやない。ちよつとしたコツを教わつた…というか気づいただけでの。それを必死で真似…というか実践しただけでの」

肝心なところは煙に巻いて話す彼が、珍しく饒舌だったあの時、

「…思えばあれが始まりだったわい。あの異質な存在感と…神だか悪魔だか…到底、人とは思えないほどの雰囲気纏っておった…」

確かに…そう言っていた。

（神だか悪魔だか…それほどの人物、開眼、そして、引退した理由の…もう一度出会ったのであるうその存在……。くそつ、私の人相よりも気になるな…）

すでに聞いてしまっている…絶対に当たるであろう、私の人相占い。それは芳しいものであった。私の心は、すでに未来予測には満足していて、彼に対する知的好奇心だけが残っている。

意外にも、彼は私の質問を待たずと言った。

「そんなに焦らすもんでもないわ。引退した今、秘密にすることもない。オカルト好きの前が好きそうな話じゃな」

言って、

「かつかつか…、冥土の土産じゃな。何から知りたい？」

乾いた笑い声とともに、彼はそう付け足した。

「メイド…？爺…、縁起でもないことを言うなよ…」

それを聞いた彼は微笑して、運ばれてきた大ジョッキを手にした。

私は目を細くして、聞いた。

「何があつて…その慧眼を身につけた？」

彼は眉をしかめて答える。

「なんじゃ？お前も占い師になりたいのか？…止めとけ止めとけ。ロクな最後にならんぞ」言って、手羽先を頬張る。

「…おぬしはわしと同じ人種じゃい。人を深く勘繰ると、不幸になる人種なのよ。感じとろう？わしとここまで長く仲良くやってこれたのは、同じ人相にある人間だからなんじゃ」

「安心しろ。あるのは知的好奇心だけだ。この年になって、今更占い師なんかやらんわ。爺さん…誰と出会って、何を学んだ？」

「わしが占いを始めたのは、おぬしより年をとってからじゃがのう…」

彼はしわしわの顔をさらにしわくちやにさせた。

『お前、ホレ…。新聞社勤めだったら知つとろうが？…あつこの教祖様じゃ。…氷川の「深い森」のこと知らんか？』

「深い森」…前田千歳という女性を教祖として、熊本県は八代市の氷川の山中で、自給自足で暮している…総勢五十人ほどの新興宗教団体のことだ。

「そうか…あの白い女が絡んでいたのか」

彼は意外そうな顔をして、

「なんじゃい…？会つたことがあるのか？」

「学生の際に：一度な」

あの透き通るような白と、異様な空気感が脳裏に甦る。あれか：あの女が絡んでいるのなら、どんな話でも領ける。

「わしはな：あの白い女が子供の頃に一度会ったことがあつてな。その時はまだ：そこまでのもんを見抜けなかつたが、二度目に会った時：、その目の奥にあつたもんを盗んだんじやよ。そして、世界の理を彼女から学んだ。：：：わしやその理を必死で学んで、彼女の眼の奥にあるものを自分も宿そうと、そう思つて実行しただけじや」
言つて、付け足した。

「そりや：物理的には人間じやい。だがの、中身の方は人間をゆうに超えとる：。おぬしの言うとおり、人外と表現しても差し支えないわな：ありや」
そして、爛された酒を一口、ズズ：と飲んで続けた。

「もしも、：また会いたいと思うんなら止めておけ。どうしてもというなら：人を介せ。おぬし以外だつたらまず人畜無害：。わしやおぬしと同じ相は、なかなかおらんからな」
彼の目はいつになく真剣だつた。これは外れない：。素直にそう思つた。

私は息を飲んで、もう一つの質問をする。

「なぜ店を閉めた？」

彼は熱燭もビールも飲み干して、赤い顔で遠い目をして言つた。

「見たからじやよ。もう一人の人外のをな：」

「一週間ほど前、何の前触れも無く：年上の男と二人でわしの店に来おつた、若い：娘じやつたわ。目だけで語るヤツだつた。正直：目と思考そのものが深すぎて、わしじや読みきれなんだ：。いやはや、驚いた」

彼は、いやに神妙な顔つきでそう語つた。

「：若い女？」

「ああ、奇抜な格好の女だつた。ランドセルみたいな赤いカバンを持つてな。見た目は常人なんだが：、話し振りや：いや、やはりきやつ目の目も、そこから知れる思ひというか、態度というか：それがなあ：」

爺の話はそれから少しだけ続いた。

私はカードで支払いを済ませ、飲み屋を後にした。爺は、

「おい、人生は楽しむもんだぜえ：細けーこたあ考えようとすんなあ」

と言つて、随分に飲まれたフラフラの状態でタクシーを拾つて、帰途に着いた。

時候は、年が明けて間が無い：冬の世相を演出している。国内でも南に位置する熊本市といつても、この時期の身震いする肌寒さはどこも変わらない。雪こそ降らないが、息は白く、あまり外に長くは居たくない。が、夜はすっかり更け、雑踏の音もフェイドアウトしていく時の、この黒の空の下、私は自宅まで歩いて帰ることにした。そういう気分だつた。

元々：化け物だとか、鬼だとか、神だとか、悪魔だとか、すべては人間の在り方や、それ

でなくとも…人間に起因することが圧倒的に多い。

キリスト教の神であるイエス・キリストは人間であったし、生きながら仏となったお釈迦様だって、物理的には人間だった。MONSTERのヨハンだって人間だったし、昔話に出てくる赤鬼も、西洋からの渡来人だったという説がある。

そういう異質な存在は、たとえ科学的には人間でも、印象的には人外になる。そして、この現代においても、今日のような宴席の四方山話に尾ひれがついて、人々の噂となり、四方に広がっていく。そう、人の恐怖心や興味心のようなものを喰らい、人々の心にある…畏怖される存在だけが大きくなっていくのだ。

しかし、稀にその人々が噂する…想像する人外の姿を、実像が大きく上回るといふ例があることを私は知っている。

私は、藍老爺の人生を変えた白い女…前田千歳という教祖様と会って、一言二言話したことがある。猟奇殺人があつた直後の現場で…。あの時の印象は、私自身の中で畏怖され、誇大化している可能性もあるうが、後に聞いた彼女の数々の噂が、私の心象のモノを上回ることはただの一度も無かつた。

「…くらした、あずさ」

藍老爺は、自身を引退させるに至らせた…人外のモノの名をそう語った。そして、「白い女と同じじゃ…おぬしは絶対に会うな。会うのであれば人を介せ…」とも。

私は新聞社に勤務して十年ほど。年齢の割に、そこそこの位置まで登り詰めた。そしてここに至って、自分の趣味でやっている、オカルト季刊紙「不思議な女の子」を中心とした出版社を立ち上げ、それで独立したかつた。藍老爺は、

「…おぬしは帝王の相を持つてる。何をやつてもそれなりの成功はするじやろうよ…好きにやればいい…」

そう言っていた。

「…決めた。その、くらしたあずさを取材して次号に載せて…、それで独立案を具体的に詰めていこう」

この寒空の下、私は藍老爺の話を反芻するようにして、自宅まで歩いた。白い吐息を宙に舞わせながら。

彼の訃報が届いたのは、それから一週間も経たないうちだった。川縁で釣りをしていたところ、複数の中学生に暴行を受け、川に落ちて溺死したという。

(…なんと、無残な…)

仕事申中だった私は、警察からの連絡に目頭が熱くなるのを必死で抑えた。

さらに数日を経て、少しは落ち着いたか…という頃、思考が勝手に色々考える。

(…あれほどの人が自分の最後を見落とすか？…いや、予見していたはず…。引退…、待ち時間…、冥土の土産…。自分の占いの秘密をべらべら喋ったのも今なら領ける…)

(白い女の目の奥にあったもの??…世界の理って…。…思えばあれが始まりだった…。だと??)

白い女には、もう会いたくないし、藍老爺にも会うなど釘を刺されている。くらしたあずさの方は、…どうだろうか。

私はぼんやりと…形を定められない雲のような、ふわふわとしたことを考えていた。いかにオカルト好きで、マンガみたいなの…突拍子も無い解釈の余地を与えられた私の脳みそでさえ、彼の一生を想像できるには至らなかった。

「好きな食べ物は、後に残すタイプだしな…私は」

一歩一歩、気になることは時間をかけて、少しずつ詰めていこう。私はそう思って、職場のデスクに顔を伏せて泣いた。